慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	葬送儀礼と親族概念
Sub Title	Mortualy practice and kinship
Author	佐藤, 桂子(Sato, Keiko)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1992
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.34 (1992.) ,p.67- 75
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000034-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

葬送儀礼と親族概念

Mortualy practice and kinship

佐　藤　桂　子

Keiko Sato

The purpose of this paper is to elucidate the characteristic of "shinseki„, Japanese kindred which incluses affinity.

The data presented here was collected during my research conducted in Iwafune, Iwata prefecture. Iwafune, a mountain village, contains 32 houses with 118 inhabitants. The people living here recognize "almost the villageres are 'shinseki, each other.„

So, in Iwafune I reserch kinship organization, especially the concept of "shinseki„ in terms of mortuary practice, consists of mortual parade, "soushiki gyouretsu„, an obituary gift, "kouden„ and "hotoke-ogami„ practice. And how the people who are considered "shinseki„, organize the functional group.

In enclusion, I propose that at the grouping of shinseki, these two facteres are valid in Iwafune. One is the place of residence, the other is a status of affinity.

1. 序　55
2. 調査地域概要　55
3. 葬列順序帳と親族　56
4. 香奠帳と親族　59
5. ホトケオガミと親族　60
6. 結

1. 序

本論文では，日本におけるキンドレッド (kindred) の特殊例としてシンセキを取り上げ，シンセキと呼ばれる範囲が，集団を結成する際に働く基準は何かという問題について論じることを目的とする。

キンドレッドとは，個人を焦点として，血縁を双方的 (bilateral)，つまり父方・母方を等しくたどる親族の範囲を示す分析概念である。日本の民族概念でシンルイ・シンセキと呼ばれるものは，その単位であるイエの性格が影響を及ぼす諸特徴を別にすれば，基本的にはキンドレッドと同じ構造的性格をもつとする立場[1]に依拠して，ここでは論を進めていく。

個人を焦点とするシンセキの範囲は，理論上は無限に広がりゆく同心円を描き，中心から遠ざかるにつれてその関係が薄くなるカテゴリーとして捉えられよう。しかし，実際の場面においてシンセキは，シンセキとして機能する集団として現れてくる。例えば，葬儀の際に行われる葬式行列では，与えられた行列の役割を果たすことによって，儀礼集団としての機能を果たしている。

ここでは具体的な調査結果に基づき，葬送儀礼というシンセキが一堂に会する機会を事例として，それに関与するシンセキと呼ばれる人々とは，具体的にはどういう人々であるのかを見ていきたい。すなわち，理念としてのシンセキと，ある1人の個人を中心に集まったシンセキと思われる人々の集合が，どういうプロセスを経てシンセキを構成・認識するのかに注目して考察していきたい。

2. 調査地域概要

調査は，1990年から1991年にかけて，岩手県宮古市岩船において行った。岩船は，人口118名，戸数32戸 (1991年1月7日現在) の，比較的小規模な山村形態のムラである。主な生業は農業で，1985年には総農家数は

23 戸であるが，そのうち専業農家数は 2 戸に過ぎない。23 戸のうち，田を有しているのは 22 戸で，少なくとも自給分の米は賄っている農家が多い。また，山林を保有している農家も 20 戸と多い。[2] 山林では，木材生産や椎茸栽培が盛んである。椎茸栽培は，昭和 35 年頃から始まり，現在は 13 戸が携わっている。採れた椎茸はおもに乾燥椎茸として市内及び盛岡の農協に出荷している。

岩船 32 戸のうち，その過半数を占める（約 65%）21 戸が同じ S 姓を名乗っている。源氏の落武者の姉と弟がこの地を開いたとする伝承もあり，S 姓も大きく姉系と弟系の 2 系統に分かれ，それぞれ大本家を別にしている。S 姓の次に多いのは T 姓で，その戸数は 7 戸である。S 姓と T 姓の合計は 28 戸で，岩船全戸の 87.5% に上る。残る家々も，なんらかの形で S や T の家と姻戚関係を結び，岩船内で親族関係上，全く孤立している家は最近この地に雑貨商店を開いた家のみである。

ゆえに，岩船には大きく分けると 3 系統の本分家関係が存在すると言えよう。S・姉系と S・弟系，それに T 系がそれである。

T の姓を有する家は，相対的に戸数が少ないことも相まってか，系譜関係は不明確であるが，自分の家から見てどこが本家であるか，どこが分家であるかという認識だけは，はっきりしている。けれども，中心となる T 姓の大本家の分家同士の紐帯は，希薄というよりほとんど意識されていないし，ホトケオガミにも行き来がみられない。ホトケオガミとは，お盆の際に，各家に作られた盆棚を拝みに行く慣行をいい，シンセキと認識している範囲で行き来することが多い。ただし，そのホトケオガミにも，直接の本家と認識しているところへは訪れるし，年頭に「オレイ」（お礼）と称する年始参りに行ったりしている。ここで重要視されているのはむしろ，本家を同じくするいわゆる同族団的結合よりも，その家にとって直接の本家と，現在の戸主から世代的に近いところでヨメ（ムコ）のやりとりのあった家々との姻戚関係のほうであるといえよう。

岩船の本分家関係は，その具体的な系譜関係が不明な場合もあるが，どこの家が本家で，その分家はどこであるかといった意識は明確である。さらに，この本分家関係に加えて，姻戚関係も複雑な絡みを見せている。部落内婚もかつては盛んに行われていて，「ムラじゅうシンセキのようなもの」という感覚がある。S・弟系の大本家の「うちが岩船では一番シンセキが多い。（岩船 32 戸のうち）22 戸がシンセキだ。」という言葉から，分家やヨメのやりとりをする家を「シンセキ」とカウントすること，日常会話に即座にシンセキの戸数が出てくることなどから，シンセキに対する意識が高いことが伺い知れる。この，シンセキの認識過程や認知程度がどのようなものであるのか，S・弟系の大本家での葬送儀礼を事例に，以下に論じてみたい。なお，対象とする家を便宜上ここではその屋号を用いて「大家」と記述する。

3.　葬列順序帳と親族

大家は，岩船のほぼ中央に位置する S・弟系の大本家とされる旧家である。

この家ではオミョウジンサマという氏神を祀っていて，かつてはムラ中の人々が祭礼日には参拝に訪れたというが，今は大家の家の者のみで祝っている。

大家からの直接のカマド（分家）と認識している家は岩船内に 3 戸ある。その 3 戸にも各々氏神があり，個別に祭礼を行っている。カマドは古い順から一番カマド，二番カマドと呼び，カマドのカマドを本家から見てベッケと呼ぶ。岩船内には大家のベッケが 1 軒ある。このベッケは，直接の本家の氏神に，祭礼日にはお参りに行くが，大本家である大家の氏神祭祀には参加していない。

さて，葬列を中心に現地の人々がシンセキと呼ぶ範囲を確立し，その果たす役割や機能をみていくことにしたい。葬列で一定の役割を果たす者には，まず第一にその故人の帰属する家の本分家関係やシンセキ関係にあたる家の者，そして次に故人あるいは喪主と交友関係にあった者とに分けることができる。

岩船における葬列でも同様であるが，その中心的役割は，故人と血縁と姻戚を含めた親族関係を持つ者が担っている。

ここでは，大本家である大家の「葬列順序帳」を分析して，その内容から親族のあり方をみていくことにする。

葬列順序帳とは，いわゆる野辺送りにおける諸役割を，その役割者とともに記した覚書である。ある家に死が発生すると，直ちにその家の本家，戸主の兄弟・姉妹が集まって，葬列における役割の担当者を話し合って決める。現在では，実質的には野辺送りの行事自体は行われてはいないが，役割別に任命者を決め，それを葬列順序帳に記載する行為は，依然として残っている。

岩船において，[3] 葬列順序帳において記載されている役割は全部で 22 ある。[4]（表 3-1）それを，役割に関与する人の性質に着目し，岩船内での説明体系に基づき分類すると，大きく次の五つのレベルに分けることができる。

表 3-1

役割名称	役割／人数	期待される関係
供野火（とものび）	死者のお供／1人	仏に近い人。性別は関係ないが，たいていは部落の女性。〈友人・親類〉
散線香（ちらしせんこう）	1人1本ずつ線香を持つ／奇数	シンセキではない，部落の人。部落で一番遠い人
孫花（まごばな）	奇数人数	厳密にマゴでなくてもよい。部落の内外問わず，小学生くらいの小さい子供。男女も問わない。
台花（だいばな）	白い和紙の細工による花を持つ／偶数	遠いシンセキ。〈一般代表〉
台菓子（だいがし）	南部せんべいを縦に2個並べたものを持つ	台線香よりは遠いシンセキ。台団子と同じようなもの。〈親戚〉
台団子（だいだんし）	団子を縦に2個並べたものを持つ	台線香よりは遠いシンセキ。台菓子とは同じ位の近さ。〈近親・身内〉
台線香（だいせんこう）	台付きの線香を持つ	台菓子，台団子よりは近いが，大差はない。〈親戚〉
燭台（しょくだい）	ろうそくを立てる台を持つ／2人	近いミウチ・シンセキ。その家というより，死者個人に対して近い人。〈近親〉
香炉（こうろ）	1人	〈近親・身内〉
死花（しにばな・しか）	紅白の花（紙細工）をそれぞれ2本ずつ持つ／2人（計4本）	カマド〈分家〉
鍬（くわ）	紙で作った鍬を持つ／1人	イトコやキョウダイなど〈近親・身内〉
野団子（のだんご）	鍋ずみを入れて黒くした団子を持つ／1人	墓印の一つ下の地位。〈近親・身内〉
御茶（おちゃ）	1人	〈近親・身内〉
御水（おんみず）	1人	〈近親・身内〉
贈物（おくりもの）	死者に贈るものを持つ。かつては着物などを一緒に埋葬していたが，今はさらし等を持って後で寺に寄進する。／1人	〈近親・身内〉
枕飯（まくらめし）	山盛りにしてお箸をさした御飯を持つ／1人	〈近親・身内〉
墓印（はかじるし）	1人	本家。女性の場合は実家の当主。〈実家（本家）〉
位牌（いはい）	位牌を持つ／1人	喪主。仏に一番近い人。その家のイエトリ。〈喪主〉
棺陸尺（かんりくしゃく）	遺骨を持つ。かつては棺を担いだ。／1人	仏に近い人であるが，その家のイエトリではない人〈遺骨・身内〉
前綱・後綱（まえつな・うしろつな）	もともとは，棺からのびていた綱を持つ役割／奇数	メイやマゴなどの女性。前綱と後綱を併せた（エンズナ）合計が偶数になってはいけない。

①…死者の家の者がなるべきもの（A）

②…「近いミウチ」がなるべきもの（B）

③…本家あるいは「カマド（＝分家）」といった，本分家関係にある家の者がなるべきもの（本家＝C/カマド＝C′）

④…「遠いシンセキ」がなるべきもの（＝D）

⑤…「シンセキではない部落の人」がなるべきもの（＝E）

表 3-2 は，この A～E までの5つのレベル表示を利用して，岩船における葬列役割の理念と実践のずれを表にしてみたものである。ここで言う理念とは，岩船の人々が認識している「規範」（＝説明体系）を，実践とは，行為として現れ出た側面，を，それぞれ表現している。実践レベルとしての表記に基づく基準は，

A＝死者の家の者

B＝インフォーマントがその系譜的位置付けをきちん

表 3-2　葬列役割の理念と実践

役割名称（人数）	理念レベル	実践レベル	備考
位牌（1人）	A	A	
棺陸尺（1人）	B	A，B	
供野火（1人）	B	A，B	
墓印（1人）	C	B，C′	
野団子（1人）	B	B，C′	
枕飯（1人）	B	B，C′	
御茶（1人）	B	B，C′	
御水（1人）	B	B，C′	
贈物（1人）	B	B	
御鍬（1人）	B	B	
香炉（1人）	B	B	
御写真（1人）	B	B	比較的新しい役割
燭台（2人）	B	B	
死花（2人）	C′	C′	
孫花（奇数）	B	A，B	
前綱・後綱（奇数）	B	B，C′(A)	(A)＝婚出した娘
台線香（10～11 人）	D	B，D	
台菓子（8～12 人）	D	B，C′，D	
台団子（10 人）	D	B，C′，D	
台花（偶数）	D	D，X	X＝非親族
散線香（奇数）	E	E	

と把握し，たどることができるシンセキ

C＝本家[5]

C′＝カマド

D＝シンセキであると認めているが，その系譜的関係が不明なもの[6]

E＝岩船内に居住しているが，親族関係にないと互いに認めあっている家の者

である。

理念レベルにおいての A，すなわち「死者の家の者がなるべき」葬列役割名称に相当するのは「位牌」であり，実践レベルにおいても「位牌」の役割を担っているのは，死者の家の「イエトリ」である。イエトリとは，その家の家督を継ぐ者という意味で，普通は長男がイエトリとなる。死者の家のイエトリが「位牌」の役割に付くというかなり強固な規範があり，大家の家においてもそれが守られなかったことはない。イエトリが養子である場合でも，通常の場合と同様に「位牌」の役割をイエトリが担う。

また，E の「岩船内に居住しているが，親族関係にないと互いに認めあっている家の者」のなるものとされる「散線香」も，実際担っている人たちは，死者を出した家とはシンセキ関係がないとお互いに認識し合っている家の人々であり，その家は超世代的にほとんど変化が見られない。つまり，ある家にとって，そこに新たに姻戚関係等が生じないかぎりにおいて，超世代的に「散線香」の間柄である家が存在するということである。

ところが，A と E を対極とした場合，その中間に位置する理念レベルの B，C，D に属する葬列役割の，実際の特性を見てみると，必ずしも理念と実践が一致していないことが分かる。

表 3-3 において，理念レベル B に属する「棺陸尺（かんりくしゃく）」，「供野火（とものび）」，「野団子（のだんご）」，…はそれぞれ B の特性を持ってはいるが，それ以外の別の特性をも有している。そして，これらのうちすべてに共通する特性 B が理念として認識されている。同様なことが C，D にも言える。

要するに，ある共通の理念レベルのもとに認識されている一群の諸役割の中の実践レベルには，かなりのばらつきがあり一致しないが，その実践レベルの中の共通する 1 つの特徴こそが，それらを理念レベルで表象している特徴なのである。

葬列役割のうち，「死者の家の者」(＝A) と「シンセキ

表 3-3

理念レベル	役割名称	実践レベルの特性
B	棺陸尺	A，B
	供野火	A，B
	野団子	B，C′
	枕飯	B，C′
	御茶	B，C′
	御水	B，C′
	贈物	B
	御鍬	B
	香炉	B
	燭台	B
	孫花	A，B
	前綱・後綱	(A) B，C′
C (C′)	墓印	B，C′
	死花	C′
D	台線香	B　D
	台菓子	B，C′ D
	台団子	B，C′ D
	台花	D，X

ではない部落の人」(=E) は，シンセキの枠組には入らない人たちであり，それ以外，つまり B, C, D はシンセキとして認識しうる人たち，すなわち「理念としてのシンセキ」の枠に入る人たちである。ある個人にとって，シンセキという概念によって包括される人々との関係は，決して一様ではない。理念レベルで近いと感じられるシンセキもあれば，遠いと思うシンセキもある。そして，実践レベルでも同様である。

つまり，一概にシンセキといっても，「理念としてのシンセキ」と「実践としてのシンセキ」の間には差異が大きく，ゆえに，その関係の遠近の幅も非常に大きく感じられると言えよう。あるいは，多義的であるとも言えよう。多義的であるがゆえに，シンセキの遠近度も変わりえる。

例えば，ある人物の（図 3-1 の中の ● で示している女性）の同一家における 4 件の葬式行列における役割の変遷を追ってみて見よう。

図中①の男性の葬列（昭和 39 年 9 月）においては「台団子」を，同じく②の女性の葬列（昭和 39 年 11 月）で「台線香」，③の男性の葬列（昭和 59 年 10 月）でも「台線香」と，理念レベルの D（=「遠いシンセキ」）の役割を担ってきたが，④の女性の葬列（平成元年 3 月）では「御写真」と，「近いミウチ」(=B) のなるべき役割を担

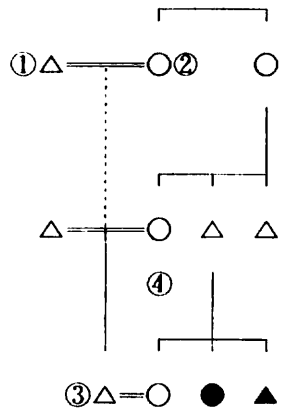

図 3-1　役割の変遷

当している。

この女性（図中 ●）は，④の兄の娘，つまりメイにあたる。④とは，個人的に近い関係にあたるが，④の所属する家という単位から見ると，その関係は必ずしも近いものではない。そのことがこの女性の，故人の属する家家から認識される理念レベルでのシンセキ度の推移を物語っていると，思われる。

また，別の事例として「台線香/理念レベル D」(①) →「台団子/同 D」(②) →「香炉/同 B」(③) →「香炉/同 B」(④) と変遷している男性（図中 ▲）もいる。この男性は③の妻の兄にあたり，③の妻の実家の戸主でもある。この男性の葬列役割における地位の上昇は③の死去を契機としており，③の死去とともに，この家における③の妻の地位，及びその実家のシンセキとしての相対的地位の上昇があったことが伺える。

このように，シンセキは，意味の多重性を内包する柔軟性に富んだ概念であり，状況に応じた変位をも可能とする「場」であると言えよう。

4. 香奠帳と親族

香奠は，古くは食料贈与が中心であったが，次第に金銭贈与に移り変わっていったことは有賀喜左衛門によっても明らかにされているが（有賀 1968），岩船の場合，現在も金銭贈与の香奠とともに豆腐・白米・モチ米等の食料贈与による香奠が併存している。

岩船における香奠贈与全体を通して，まず言えることは，香奠の金額の多さが，必ずしもシンセキの近さを物語っているわけではない，ということである。つまり，金額だけを見て多い順に並べ替えても，その家のシンセキ関係の遠近は判明できない。

表 4-1　シンセキレベル別の香奠贈答

シンセキ度	香奠金	御仏前	豆 腐	白 米	モチ米	酒・他
B1	◎	×	◎	◎	◎	◎
B2	◎	△	×	×	×	△
C′1	◎	×	◎	◎	◎	◎
C′2	◎	×	×	○	○	×
D1	◎	×	◎	◎	◎	○
D2	◎	○	×	×	×	×
E	◎	×	×	◎	×	×
X	◎	×	×	×	×	×

凡例　B1＝岩船内に住む「近いミウチ」B2＝岩船外に住む「近いミウチ」C′1＝岩船内に住む　カマド　C′2＝岩船外に住む　カマド　D1＝岩船内に住む「遠いシンセキ」D2＝岩船外に住む「遠いシンセキ」E＝「シンセキでない部落の人」X＝「他人の人」
◎＝80%以上　○＝50%以上 80%未満　△＝20%以上 50%未満　×＝20%未満

それでは，香奠の何を見てシンセキの度合いを知ることができるのだろうか。

表 4-1 は，岩船におけるシンセキレベル別の香奠贈答の一覧表である。この表で表している B〜E までのレベル分けは，前章での基準に依拠したいわゆる理念レベルであり，そのうち B, C, D に関してはそれぞれ岩船部落に住んでいるか否かという居住条件によって，さらに 2 つに分けて示してある。例えば B の場合では，岩船に住んでいる者を B1，住んでいないものを B2 とする。そしてこれらに加えて，シンセキではない「他人の人」という項目を X として一覧表に加えている。香奠贈答の場合，このようにシンセキ以外に非親族の占める割合が，葬式行列やホトケオガミと比べて比較的大きいことは，その特徴のひとつであると言えよう。

B〜E，それに X を付け加えた表に記載しているレベルのうち，シンセキと認知できる範囲は B〜D までである。インフォーマントの認識レベルによれば，シンセキ関係の深度は B, C, D の順に漸次浅くなっていくはずであるが，表 4-1 を見てみると，香奠贈答とシンセキ深度は一致していないことが分かる。

香奠贈答のパターンとしては，B1 と C′1, D1 がそれぞれ類似した形式をとっている。B1, C′1, D1 は，いずれも岩船内に居住するシンセキで，その遠近に多少の差異はあるものの，香奠贈答としては，香奠金は言うに及ばず，豆腐・白米・モチ米の三点セットを持ち寄ることが，行動パターンとして期待されている。

その他にも，シンセキ度の高さが期待されるレベルになるほど，豆腐・白米・モチ米という「三点セット」に別の品物をプラス α として持参してくる率が高くなる。追加品はたいていの場合，食料品で，表中で「酒・他」としたものがそうであるが，具体的には，清酒の他，柑橘類やソウメン，食パン等多岐にわたっている。豆腐・白米・モチ米の「三点セット」が岩船の居住条件を満たしていないと送らない傾向が強いのに対して，これらの食料品は，その送り手の居住地の制約は受けない。

以上のことから，一般に，食料品を香奠として贈答する家は，葬儀を出した家との間に何らかのシンセキ関係が存在すると言えよう。金銭のみを「お香奠」として持参してくる場合は，葬儀を出した家というよりむしろ，葬儀を出した家に属する人，あるいは属していた人との間の個人的関係が強調されるケースが多い。その関係とは多くの場合，非親族関係であり，たいていは友人関係であったり，職場関係であったりする。つまり，食料品を持参せず金銭のみの香奠贈答者が一番関係としては遠い。いわゆる「他人の人たち」(＝X) となる。ここに「三点セット」の食料品という金銭という対極的な構図が浮かび上がる。

つまり，岩船の香奠贈答を通じて表現されるシンセキは，その系譜的関係もさることながら，居住条件によって大きく左右されている。その指標となる居住範囲は岩船という部落で，その成員であることを示す香奠内容が，豆腐・白米・モチ米の「三点セット」であると言えよう。

5. ホトケオガミと親族

ホトケオガミとは，8 月 14 日から 16 日までのお盆の時期に，ホトケ[7] に関係のある人々が，各自その期間内の都合の良い時に，ホトケのある家にやって来て，「ボンダナ」(盆棚)[8] の位牌にお参りすることをいう。

ホトケオガミを，実際に岩船の人々がどのように認識しているのかというと，「お盆の時期に，シンセキがホトケを拝みに集まってくること」とする捉え方が一般的である。また，シンセキという言葉は用いずに「その家のホトケを拝みたい人がくる」行事であると説明するインフォーマントもいる。

図 5-1 は，ホトケオガミの典型的事例を簡略化して図式化したものである。④，⑤，⑥，⑦ は，それぞれ①の孫として個人的には，均等な距離に置かれているもの

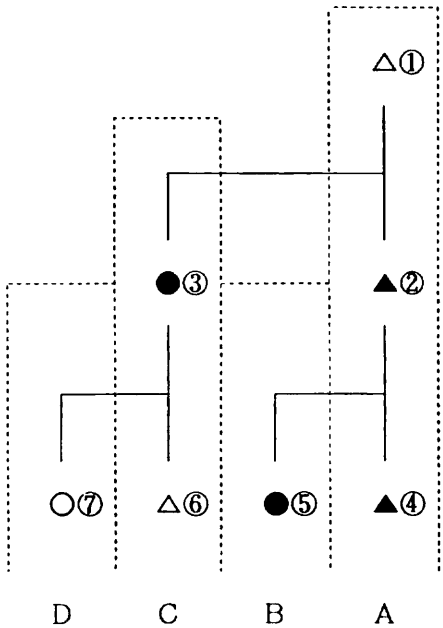

図 5-1　A家ホトケオガミ参加者
（▲／●）（…は，家の枠を示す）

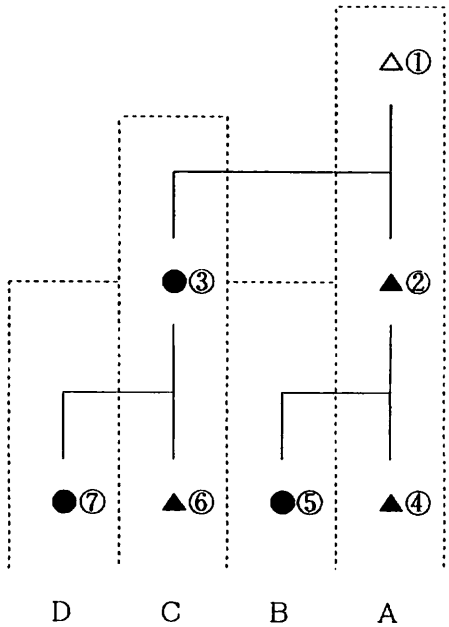

図 5-2　A家葬送儀礼参加者
（▲／●）（…は，家の枠を示す）

の，ホトケオガミへの参加は④と⑤のみである。これはホトケオガミが個人よりも家を主体に行われる慣行であることを示している例であると言えよう。C 家で，③がすでに死去している場合には，ホトケオガミに⑥が出向くことは少ない。また逆に，そのようなケースで⑥が出向く場合とは，C 家と A 家が同一部落内に居住しているケースがほとんどである。「行き来がなくなると，シンセキでなくなる」という意識があり，系譜関係が遠くなった家から次第にシンセキ関係も薄くなっていく。しかし，その推移の仕方も一様ではなく，婚出後の居住地の条件が，その後のシンセキ関係にも影響を及ぼす。つまり，同一部落内に住むことが，シンセキ関係をより永続化させる傾向があると言える。

同じ，シンセキを単位とする葬送儀礼とホトケオガミではあるが，葬送儀礼が死者というひとりの個人を中心とした親族が集合する場であるのに対して，ホトケオガミはそのイエを中心とした親族の集う場である。

葬送儀礼においても，葬式行列への参加や香奠の名義にはイエ単位の原理が働き，行動がイエ単位で把握されることが多い。しかし，そこに集合している親族は，あくまで死者との個人的系譜関係が優先されている。図 5-2 は，A のイエの①の葬儀における参加者を示したものであるが，ホトケオガミの時には参加していない D 家に婚出した⑦の参加も見られる。さらに，C 家のように同一世帯から 2 世代，あるいは 3 世代の参加もあり，仮に③がすでに死去しているような状況においても，⑥や⑥の下位世代の参加が見られるのが普通である。また，B, C, D が A と別の部落に居住している場合にも葬送儀礼への参加は，同様である。ただし，部落内居住者とそれ以外の者とでは，前述したように香奠の内容に差異があり，大きな区分がある。

要するに，葬送儀礼においては葬儀の対象者とその配偶者とからなるストック (cognatic stock) 及び，そのストック成員各々の配偶者に，葬送儀礼への参加が義務付けられるが，参加の記録とも言える葬式行列の役割や香奠の贈答，ひいては葬列順序帳や香奠帳への記載は，参加者の所属するイエが主体となっている。

ホトケオガミに行き来する範囲もシンセキであり，葬送儀礼に参加する単位もシンセキである。ともに，それぞれの規範に基づいてシンセキと認識される人々の中から結成される集団である。このように，シンセキは結成する時と場に応じて変化して，集団とカテゴリーの間を揺れ動き，その範囲も自由に変わり得る性格を持つ概念であると言えよう。

6. 結

以上，葬列順序帳，香奠帳，ホトケオガミという材料を用いて，それぞれに現れる親族概念，とりわけシンセキについて論じてみたが，シンセキという「親族の場」の中に，いくつかの指標があるように思われるので，ここで整理してみたい。

第一に世代的距離の問題が挙げられよう。世代的距離とは，理念レベルでいうところの B（=「近いミウチ」）と D（=「遠いシンセキ」）を対立要素とする指標である。B と D は，いずれもシンセキと認知されているものであり，B は世代が経つにつれてやがては D へと移行していくべき存在である。従って，葬列役割においても，ひとりの個人が同一のイエの葬儀において，B の役割を演じることもあれば，D の役割を演じることもある。言ってみれば，遠近感に基づく連続的で互いに包接的な概念であるとも言えよう。

第二の指標として挙げられるのが「系譜的距離」である。これは，本分家関係として，永続的に集団化が可能なグループと，あくまでカテゴリーとして流動的なシンセキとの対立に現れている。この両者は，先の世代的距離における対立項のようには包摂的ではなく，非連続的で排他的な概念である。

そして，最後に挙げられるのが「空間的距離」である。空間的距離とは，同じシンセキのカテゴリーに属していても，ある居住空間の内に住んでいるか，外に住んでいるかによってシンセキの度合いが変わることに現れている指標である。居住条件は，客観的に判断できる材料であるため，これもやはり二番目の系譜的距離同様，排他的，対立的な関係を生じさせる概念であると言えよう。第二と第三の距離の性格の違いは，前者が血縁に，後者が地縁に基づくものであることに求められる。

自己を中心とした親族の範囲は，ある共通の祖先を介してその系譜的関係がたどり得るようなリニージと異なり，固定的で限定されたものではない。従って，なんらかのアクション・グループを結成する際には，そこに成員を選択する基準といったものが必要となってくる。それが岩船の場合，これら三つの距離の指標であり，具体的に言えば，居住条件（空間的距離）とヨメ（ムコ）の婚入先でのステータスの変化に伴う姻戚の（本分家関係に対する）相対的な地位であると言えるのではないだろうか。

以上，日本におけるキンドレッドの例としてシンセキを取り上げ，カテゴリーとしてのシンセキが集団を結成する際に働く基準は何かという点に焦点を合わせ，具体的調査結果に基づいて論を進めてみた。

従来，シンセキあるいはシンルイという民俗概念で語られてきた日本における親族カテゴリーを，キンドレッドとして理解すべきだという立場は 1960 年代半ば頃から中根千枝や蒲生正男ら[9]によって提唱されてきた。これは恐らく 1959～60 年にかけての人類学の流れの中で「出自」(descent) 一辺倒だった親族理論に，出自集団とキンドレッドという概念の区分けが生じたことが原因であったと言えるだろう。

また，民俗学において，香奠帳分析によるシンセキの遠近を測る方法も比較的早くから行われてきたことであったが，これをキンドレッドの集団結成の契機と関連させて論じられたものは，ほとんどなかったと言えよう。

この論文は，以上のような流れの中で，日本の親族のあり方を考え直す試みである。今後，他地域のキンドレッドと比較考察していきたい。

付記）本論文は，1990 年度慶応義塾大学大学院社会学研究科に提出した修士論文の第 5 章を中心に加筆，修正したものです。指導してくださいました先生方，そして調査地の皆様に御礼申し上げます。

註

1) 小川正恭，1971，p. 36 など。
2) 農林水産省 1985 年世界農林業センサス農業集落カード。
3) 同じ宮古市内においても地域差があり，一様ではない。しかし，現在では葬儀会社の作成した葬列順序帳が普及し，地域差が少なくなってきているようだ。
4) 「前綱」と「後綱」を合わせて「イロカブリ」と数えると 21 役割。
5) モデルとした家自体が大本家であるためここでは C（本家）は存在しない。
6) 具体的には「シンセキ」，「イトコ」，「母方のマキ」という表現をしている。「イトコ」と言っても，実質的なイトコ関係にある者を指すのではなく，「同世代のシンセキ」といった認識をしている。
7) その家で亡くなって，その家に位牌がある故人。
8) お盆の期間中，座敷にひな壇状の棚を作り，歴代の位牌をお供え物，お花（これを特に「盆花」という）などとともに飾る，その棚のこと。
9) 中根千枝 1967，蒲生正男 1968。

参考文献

有賀喜左衛門　1968「不幸音信帳から見た村の生活」『有賀喜左衛門著作集』5: 199-252 未来社
Freeman, J. D. 1961 On the Concept of the Kindred,

Journal of the Royal Anthropological Institute, Vol. 91: 192-220
蒲生正男ほか 1968 シンポジウム「日本の親族組織をめぐって」『民族学研究』33(1): 45-51
河合利光 1973「《親類》について」『社』6(2): 71-79
Mitchell, W. E. 1963 Theoretical Problem in the Concept of Kindred, *American Anthropologist*, 65: 343-354
村武精一 1973『家族の社会人類学』弘文堂
Nakane, C. 1967 *Kinship and Economic Organization in Rural Japan*. The Athlone Press
小川正恭 1971「キンドレッドの類型」『社』4(1·2): 31-38
竹田 旦 1969「シンルイとその特性」和歌森太郎『陸前北部の民俗』: 38-62 吉川弘文館